

『レコード音楽読本』にみる野村光一のレコード観

濟 川 貴

(本講座大学院博士課程前期在学)

Music Critic Koichi Nomura's View of Record Music in "Rekodo Ongaku-dokuhon"

Takashi SUMIKAWA

はじめに

大正後期から昭和初期にかけては、海外から著名な演奏家が多く日本にやってきた時期であった。特に、第一次世界大戦で日本が加担した同盟国側の影響は強く、それまでほとんどなかったフランスやアメリカ、ソヴィエトの演奏家の来日も多くなった。また、これと同時に日本から欧米諸国へ音楽留学に行き、留学地の音楽を持ち帰ってくる者も増えたため、日本の楽壇には以前にも増して多様な音楽が存在するようになった。

蓄音機とレコードは、大正から昭和初期にかけての市場拡大、ダンピングによる価格の定価が影響して急速に普及した。市販のレコードの中では、邦楽や流行歌の人气が依然として高かったが、日本の楽壇の充実に伴い、洋楽の人气も次第に高まり、海外のレコードが多数輸入されるようになった。一方で輸入盤のレコードは価格が国内のものに比べて高価であり、一般市民にとって購入しやすいものではなかった。つまり、一般的な洋楽ファンの多くは、レコードを購入する際に極めて慎重な選択が必要だったのである。

『レコード音楽読本』は、音楽評論家である野村光一がヴィクター、コロムビア、ポリドール、パーロホンの4社のレコード会社におけるレコード総目録から廃盤を除くほとんど全ての市販レコードを鑑賞し、演奏の解説や評価などについて執筆したものである。本研究では、『レコード音楽読本』の分析を通して、野村光一が当時の時代背景の中で提唱したレコード選択及び鑑賞に対する考え方を明らかにすることを目的とする。

1. 『レコード』音楽読本の概要

野村は『レコード音楽読本』の最初の項において、自身のレコードに対する価値基準について言及している。野村の価値基準には、①旧吹き込みのものを選択しない、②録音の質と、実際の演奏の質とでは、後者を優先する、といった指針がみられる¹⁾。①については、旧吹き込みレコードの独特な音質に対して野村が音楽的な価値を見い出していないことの現れであると言える。また、②については、レコードを通しての音楽よりも、レコードを通す前の実際の音楽の質を重視することの現れであると言える。

このような野村の指針は、『レコード音楽読本』におけるレコード批評並びに演奏団体及び演奏者批評において、一貫して適用されるものである。

2. 蓄音機で鑑賞する際の弊害

『レコード音楽読本』では、演奏形態をオーケストラ、指揮者、室内楽、ピアノ、バイオリン、チェロ、声楽の7つの演奏形態に分け、それぞれについて実際の演奏の場合と蓄音機を用いた場合との相違点や、蓄音機を用いることによって生まれる弊害について述べている。図1は、野村の記述をもとに各演奏形態と蓄音機との相性を筆者がまとめたものである。

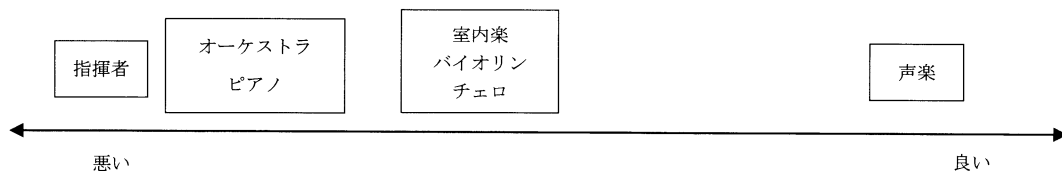


図1 各演奏形態と蓄音機の相性

声楽以外の演奏形態は蓄音機を通す際に弊害があり、あまり相性がいいとは言えない。特に視覚的要素の大きい指揮者が最も相性が悪く、ついで音色の複雑さや発音原理の問題で実際の演奏の質とは大きく変化してしまうオーケストラとピアノが、相性が悪いと判断している。それぞれの演奏形態における蓄音機の具体的な弊害については、以下にまとめる。

(1) オーケストラを蓄音機で鑑賞する際の弊害

野村光一は、オーケストラを以下の点において最も録音の難しい演奏形態として挙げている²⁾。まず、オーケストラの音量の幅が、他の演奏形態に比べて極端に大きいことを挙げている³⁾。蓄音機は、性質上音量の大きい場合はそれを縮小するように、音量が小さい場合はそれを拡大するように再生される。そのため、オーケストラのように強弱の幅が大きい演奏形態では、この影響を顕著に受けてしまう。

次に、オーケストラの音色が様々な楽器の音色が混ざり合っただけで生まれるものであるため、それを正確に再現することが困難であることを挙げている⁴⁾。野村はこの点について、オーケストラの最大の魅力が失われるとして、強調している。また、蓄音機で鑑賞することに慣れていない人にとっては、管楽器の音色の区別さえ難しいことを指摘している⁵⁾。

以上のような点から、野村は蓄音機でオーケストラを鑑賞する際に、スコアを併用して用いることを推奨している⁶⁾。つまり、スコアを見ながら、蓄音機によって湾曲した不鮮明な箇所を紐解きつつ、また、表現の不十分な箇所を想像で埋めるようにして鑑賞するのである。これは、蓄音機から出る音に対して、より実際の演奏に近いものを感じるとする点では効果的である。一方で、この鑑賞法にはある程度注意力を必要とするとともに、スコアを読むための専門的な知識が必要となる。よって、この鑑賞法は、真摯に音楽を鑑賞する人のために推奨された方法であることがうかがえる。

(2) 指揮者を蓄音機で鑑賞する際の弊害

映像がない以上、指揮者をレコード鑑賞のみで評価することは相当に困難である。野村光一は、この点を考慮した上で、主に指揮者の解釈の仕方、テンポの正確さ等は、レコードからでも十分に判断できるとしている⁷⁾。

(3) 室内楽を蓄音機で鑑賞する際の弊害

室内楽は、録音すること自体はそれほど困難でない演奏形態であるとしている⁸⁾。特に弦楽四重奏の場合、二重奏や三重奏と違い、録音の難しいピアノの入らない分、非常に明快に録音されるとしている。その一方で、これらの演奏形態は、楽曲理解が他の演奏形態にくらべて難しく、大衆に受け入れられにくいことを欠点にあげている⁹⁾。

(4) ピアノを蓄音機で鑑賞する際の弊害

ピアノは弦楽器ではあるが、弦をハンマーで叩いて音を出すという発音構造が、録音に非常に向かないものであるとしている¹⁰⁾。特に、タッチのニュアンスやペダリングによる効果は、蓄音機ではほとんど感じることができないとしている¹¹⁾。一方で、ごく最近（1933年当時）は各メーカーに録音方法の改善を図る動きが見られ、ピアノの演奏が非常に明確に録音されるようになったと述べている¹²⁾。

(5) バイオリンを蓄音機で鑑賞する際の弊害

バイオリンやチェロといった擦弦楽器は、発音原理上、比較的明確に録音できるとしている一方で、他

の演奏形態に比べて音色における細かいニュアンスの違いが特に重要になることから、蓄音機で鑑賞する際は、弦楽独奏曲の魅力が大きく減衰してしまうことを指摘している¹³⁾。

(6) チェロを蓄音機で鑑賞する際の弊害

チェロもバイオリンと同様に、蓄音機を通す際にその音色が大きく損なわれてしまいうと述べている¹⁴⁾。また、チェロの場合、バイオリンほど華やかな演奏ではなく、どちらかという地味で渋みのある演奏の場合が多いのだが、録音上その音色が華美に入ってしまうことが指摘されている¹⁵⁾。

(7) 声楽を蓄音機で鑑賞することの弊害

声楽については、蓄音機を通す際の弊害については述べられていない。

3. 各演奏形態における評価

『レコード音楽読本』の中心は、演奏団体または演奏家についての解説と評価である。これらは、販売されているレコードについて野村自身が鑑賞を行い、その時受けた印象を基に評価したものが中心である。これに加え、野村自身が実際に演奏会等で聴いた際の印象や、楽壇での評価、他者の著書における評価等も取り入れ、多面的な視点から総合的に評価を行っている。

(1) オーケストラ団体とその評価

オーケストラについては、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカを中心に42の団体について評価している。主な評価の観点は、アンサンブル力、表現力、演奏技術、情動性にであった。

野村は、各オーケストラ団体を国ごとの特徴と照らし合わせて評価を行っている。アメリカのオーケストラは総じて評価が高く、ドイツ・オーケストラに見られる高い情動性と、フランス・オーケストラに見られる音色の良さを併せもっていると高く評価されていた。逆にイギリスのオーケストラは、ロンドン交響楽団を除いて評価が低いものが多い。特に評価の低い2つの管弦団はいずれもイギリスの管弦団である。

表1 オーケストラにおける評価と記述傾向

	評価の高い団体	評価の低い団体
	ニューヨーク・フィルハーモニック交響管弦団 コンツェルトゲヴウ交響管弦団、 パリ交響管弦団 ロンドン交響楽団	ニュー・クイーンズ・ホール管弦楽団 ロイヤルオペラ座交響楽団
主な記述内容	<ul style="list-style-type: none"> ・フランス・オーケストラとドイツ・オーケストラの両方の長所をもつ ・アンサンブルが優秀。 ・透き通った音色 ・繊細な響き 	<ul style="list-style-type: none"> ・個々の技術に乏しい ・アンサンブル力に欠ける ・まとまりに欠ける ・演奏が常識的で冷たい

(2) 指揮者とその評価

野村は、60人の指揮者について批評を行っている。評価の観点としては、解釈、拍子感についてのもものが多く、特に解釈については重要視されている傾向がある。また、異なる指揮者が同じオーケストラ団体を振っている場合には、指揮者同士を比較し、オーケストラの力をどちらがより引き出しているかという点で評価を行っている。

ニューヨークフィルやベルリンフィルなど、前項において特に評価の高いオーケストラの常任指揮者は、総じて評価が高い傾向にあった。特に評価の低かったアルフレッド・ヘルツは、レコードでの聴き栄えを重視した独自の解釈と誇張表現が、理にかなわないと指摘されていた¹⁶⁾。

表2 指揮者における評価と記述内容

	評価の高い指揮者	評価の低い指揮者
	ワインガルトナー フルトウェングラー トスカニーニ メンゲルベルク ピエルネ	アルフレッド・ヘルツ
主な記述内容	<ul style="list-style-type: none"> ・老獪な指揮 ・旋律線を歌わせることに長ける ・拍子が正確である ・全体をまとめた上でニュアンスを出すことができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・細かい部分の配慮がみられない ・誇張表現が多い ・形式的で冷たい

(3) 室内楽奏者とその評価

『レコード音楽読本』で評価されている室内楽演奏者及び室内楽団は、62にのぼる。主な内訳は、二重奏が19組、三重奏が16組、四重奏が12組、五重奏が13組であった。主な評価の観点としては、アンサンブル力、個々の演奏技術、相性、楽曲解釈、音色の質が挙げられる。相性は、個々の演奏傾向が大きく関係する。すなわち、個々の演奏傾向が似通っているほど相性は良く、相違しているほど相性は悪いという判断が下されている。一方で、個々の演奏傾向が大きく異なっても、アンサンブルすることによってうまく均衡が保たれ、さらに個々の魅力が失われないような演奏団体については、例外的に高い評価がつけられている。

特に評価の高い演奏団体は、前述した評価の観点のほぼすべてにおいて高評価を保っていた。相性では、コルトー、ティボー、カザルスの三重奏はお互いの演奏傾向は大きく違うが、それが均衡を保ってうまくいっている例として挙げられている。一方、クライスラーとラフマニノフの二重奏は、両者の演奏傾向の違いが互いに悪い影響を与えている例として挙げられている。

表3 室内楽団体における評価と記述内容

	評価の高い団体	評価の低い団体
	コルトー／ティボー／カザルス カペー弦楽四重奏団 ブッシュ弦楽四重奏団 クレトリイ弦楽四重奏団	クライスラー／ラフマニノフ ローゼ弦楽四重奏団
主な記述内容	<ul style="list-style-type: none"> ・旋律が甘美に、よく融合されて歌われている。 ・溶け合うようなアンサンブルである。 ・演奏の性格及び特徴が似ている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個性が強すぎる。 ・技量のバランスが悪い ・アンサンブル力に欠ける。

(4) ピアニストとその評価

ピアニストについては、53人取り上げている。主な評価の観点は、技巧、音楽性、タッチなどであった。とりわけ技巧はほかの評価よりも重要視されている傾向があり、技巧が特に秀でているという評価があった場合には、他に低い評価のものがあったとしても、総合的には高く評価される傾向にあった。

表4 ピアニストにおける評価と記述内容

	評価の高いピアニスト	評価の低いピアニスト
	ロン バックハウス ホロヴィッツ ギーゼキング シュナーベル	フリードマン バッハマン
主な記述内容	<ul style="list-style-type: none"> ・技巧が完成されている ・タッチが明快 ・ヴィルトオーズの的である 	<ul style="list-style-type: none"> ・老衰による技巧の低下と解釈の湾曲 ・自身の適正を殺した演奏 ・ヴィルトオーズの気質に欠ける

ピアノは他の演奏形態にくらべて、全体的に評価の高い演奏者が多かった。表4に評価の高いピアニストとして挙げた者は、その中でも特に評価の高かった者である。特にバックハウス、ホロヴィッツ、ギーゼキングは技巧について非常に高く評価されていた。一方で、フリードマン、バッハマンは解釈の不適当性や、老衰による技巧の乱れが指摘され、低い評価となっていた。

(5) バイオリニストとその評価

バイオリニストについては、27人取り上げている。主な評価の観点は、技巧、節回し、音色についてである。ピアノのように技巧が優先されるが、音色や節回しがそれ以上に優先される傾向があった。

技巧と節回し、音色がともに優れ、またロマン的な要素をもった演奏者が非常に評価が高かった。一方で、評価の低いものはピアニストと同様に、技巧の稚拙さ、老衰による技巧の乱れを指摘された演奏者の評価は低かった。

表5 バイオリニストにおける評価と記述内容

	評価の高いバイオリニスト	評価の低いバイオリニスト
	イザイ クライスラー メニューイン エネスコ	ブシホダ ヂムパリスト
主な記述内容	<ul style="list-style-type: none"> ・技巧が完成されている ・旋律を甘く歌い上げる ・ヴィルトオーズ的である 	<ul style="list-style-type: none"> ・稚拙な技巧 ・老衰による技巧の低下及び解釈の湾曲

(6) チェロ演奏者とその評価

『レコード音楽読本』において、チェロ奏者はバイオリン奏者とは別に項を設けて述べられているが、ここで取り上げられた演奏者は9人しかいない。主な評価の観点はバイオリンとほぼ同じであるが、技術がバイオリンよりも重視されない傾向にある。また、華美な演奏はあまり良く評価されていない。

特にカザルスの評価は非常に高く、チェロのみならずあらゆる器楽奏者のなかで最も芸術性のある演奏者であるとしている。評価の低いものには、バイオリンと同様に技術の稚拙さや、老衰による技術の乱れが指摘されている。

表6 チェリストにおける評価と記述内容

	評価の高いチェリスト	評価の低いチェリスト
	カザルス マルシャル	ザルモンド スクイアー
主な記述内容	<ul style="list-style-type: none"> ・技巧が完成されている ・旋律の歌わせ方が上手い ・落ち着きがある 	<ul style="list-style-type: none"> ・老衰による技巧の乱れ及び解釈の湾曲 ・旋律の歌わせ方が足りない

(7) 声楽家とその評価

声楽については、38人取り上げられている。内訳は、ソプラノ19人、アルト4人、テノール8人、バリトン・バス7人である。声楽では、同じような発声法の声楽家を数人まとめて比較対照しながら評価を行うという形式をとっている。主な評価の観点は、声質や歌い回し、技巧が中心であるが、技巧についてはあまり重要視されていない。

声楽では、ほとんどの演奏者に対して高い評価がなされており、評価の極端に低い演奏者はいなかった。また、他の演奏形態に比べて具体的な評価の記述や、批判点が少なく、野村のあまり得意とする分野でないことがうかがえる。

表7 声楽における評価と記述内容

	評価の高い声楽家	評価の低い声楽家
	カルーソー オネーギン エリザベート・シューマン	なし
主な記述内容	・魅力的な声質 ・音域が広く、声質が均等 ・情操に富む ・技巧に富む	・音量に欠ける

4. 推薦レコードの評価別分類と評価の記述傾向

野村の評価の記述をみると、レコードタイトルが太字で記述されているものがある。太字で表記されていることについて、野村自身は特に説明をしていない。しかし、いずれも野村によって高く評価されていることから、野村が特に強く推薦するレコードであることが推測できる。このように、レコードのタイトルが太字表記のものを「優良レコード」、評価が高いものうち太字で表記されていないものを「良レコード」、あまり良い評価のなされていないものを「不良レコード」、極端に低い評価がなされているものを「劣悪レコード」として分類し、野村の評価の記述傾向をまとめたものが表8である。

表8 レコードの分類と評価の記述傾向

優良レコード	良レコード	不良レコード	劣悪レコード
<ul style="list-style-type: none"> ・同団体及び同演奏者の中でも出来が良い。 ・評価の高い演奏団体及び演奏者の録音である。 ・同タイトルのレコードのうち、質が高い。 ・レコーディングが適切。 ・評価の低い記述が少ない、もしくは存在しない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・演奏のレベルは高いが、他団体及び演奏者が、同タイトルでより良いレコードを出している。 ・演奏団体及び演奏者の質はあまり高くないが、自身の演奏傾向に適した選曲である。 ・演奏のレベルは非常に高いが、レコーディングがやや不鮮明、もしくは古い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・演奏団体及び演奏者の良い点が出ていない。 ・演奏団体及び演奏者の質はある程度高いが、録音が不鮮明。 ・商業的なプログラムである。 	<ul style="list-style-type: none"> ・レコーディングが非常に悪い、もしくは古い。

非常に高いレコードには、演奏団体及び演奏者の質が高く、かつ録音が適切である傾向が強かった。これは、2章で述べたような野村のレコードに対する価値基準が良く表れている結果であると言える。一方で、レコードの評価が低い要因は、演奏団体及び演奏者の質を除けば、録音の不良と選曲の不適当性が挙げられる。特に、録音が不明瞭で実物の原型を留めていないようなものや、演奏者の適性を顧みずに、大衆受けをねらった曲ばかり録音しているようなレコードには、非常に低い評価がなされる傾向が強かった。一方で評価の

おわりに

野村光一は、レコードマニアでもレコードファンでもなく、洋楽評論家である。このことは、『日本洋楽外史』において述べられている¹⁷⁾。『レコード音楽読本』の重要な点は、まさにここであると考えられる。すなわち、洋楽レコードマニアが洋楽レコードファンのために執筆したのではなく、洋楽評論家が洋楽レコードファンのために執筆したものである。よって、音楽的な知見から正当性のある批評がなされているし、野村自身の音楽評論家としてのキャリアのために、それらの批評がより説得力をもって感じられるのである。また、蓄音機及びレコードに過度な思い入れが無い分、蓄音機の性能や限界を客観的かつ冷静に捉え、それに即した鑑賞時の態度や心構えを提案している。

蓄音機が急速に普及し発展していた昭和初期には、蓄音機に対する人々の認識には様々なものがあった。音質が改良されるに従い、それについていく者もいれば、逆に古いレコードの音色に固執する者もいた。さらには、レコードの性能を過信して演奏会に行かずレコードばかり鑑賞する者や、逆にレコード

を疎んじて一切鑑賞しないという者もいた。

『レコード音楽読本』における野村の批評は、様々な蓄音機及びレコードに対する認識が存在する中で、音楽的な価値を第一に置いたレコード選択の指針及び模範となるに十分だったであろう。この意味で、『レコード音楽読本』は当時の聴衆に対する教育的な意味も多分にもっていたと考えられる。

注及び引用参考文献

- 1) 野村光一『レコード音楽読本』中央公論社, 1934, pp12-13
- 2) 同上 p.16
- 3) 同上 p.16
- 4) 同上 p.17
- 5) 同上 p.17
- 6) 同上 p.18
- 7) 同上 pp.120-121
- 8) 同上 p.266
- 9) 同上 p.268
- 10) 同上 pp.340-341
- 11) 同上 pp.341-342
- 12) 同上 p.349
- 13) 同上 pp.448-449
- 14) 同上 p.508
- 15) 同上 p.508
- 16) 同上 p.136
- 17) 野村光一, 中島健蔵, 三好清達『日本洋楽外史』ラジオ技術社, 1978, p.48